

文学と語学教育

——佛教大学英米学科1回生対象の意識調査の分析——

松 本 真 治

1. はじめに

英語コミュニケーション力が注目されるその一方で、文学の存在意義というものが見失われているのも事実であろう。一昔前であれば、大学教養課程の英語用のテキストとして英米文学の作品が数多く出版されていたが、今ではそのような英語テキストはきわめて少数派、ともすれば皆無に近い。教養課程から締め出されたも同然の状態にあって、文学の居場所は英文学科だけかと思えば、その英文学科自体においてすら、その存在は危ういかもしれない。佛教大学文学部英米学科は、1975年（昭和50年）に英文学科として発足し、途中2001年（平成13年）に英語英米文学科と改称し、そして2004年（平成16年）に現在の学科名となった。この2回の学科名称の変更にもなってカリキュラムも改変され、時代の流れを反映し、英語コミュニケーション力の養成に重点が置かれるようになった。現在では一般的に〈文学＝語学〉という認識がなされなくなってしまったために、英語系の学科にあっても、文学の授業は一体何のために行われるのかということを問い直す必要があるだろう。極論を言えば、もし文学と語学がまったく相容れないのであれば、英語力を伸ばすという目的で入学してきた学生に英米文学の作品を読ませることにどのような意義があるのだろうか。

世間では文学は語学学習には不向きだというのが通説のようであるが、必ずしもそうではなく、語学教育に文学を取り入れることは十分に可能であり、また有益なことでもある。文学を語学教育に用いることには様々な理由づけがで

き、主なものとしては言語習得と異文化理解という2つの側面が指摘されている (Brumfit and Carter 1986: 25; Hall 2005: Chs 1 and 2)。その他には、たとえば、内容によっては動機づけにつながる、全人教育となる、といったことも挙げられる (Lazar 1993: 15-19)。

では反対に、文学を語学教育に持ち込むことの不利益とは何であろうか。簡単に思い浮かぶのは、語学力の問題と文学に対する興味関心のなさの2つであろう。2006年度入学の英米学科生の入学時の英語力は TOEIC Bridge テストで平均133.2点であり、TOEIC Bridge スコア130点が TOEIC スコア345点に相当する (松本 2007)。たとえばサリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』やフィッツジェラルドの『グレート・ギャツビー』は TOEIC スコア730点レベルに分類されている (洋販ブックネット)。学生の英語力と原典の英語レベルがかけ離れている場合、昔ながらの文法・訳読式教授法の授業を行っているのは、作品の内容に惹かれることがない限り、学生が文学に対して興味を失ってしまうのも無理のないことであろう。ただ、平易な英語で書き直されたりリーダーを使った多読 (extensive reading) を取り入れることによって、語学力の問題を克服しながら文学を活用することもできよう (Cf. Day and Bamford 1998)。

ついで、文学に対する興味関心であるが、一般論的には文学離れが加速しており、活字よりも映像文化に興味関心を示すのが現代の兆候ではないかという印象だが、必ずしも客観的な裏づけがあるわけではない。また、文学が語学学習には役立たないと思っている学生も存在しよう (Hall 2005: 114)。そこで、本論では英米学科1回生を対象にアンケート調査を行い、彼らの大学入学の目的や、文学や語学に対する意識を把握することにより、文学と教育のあり方の方向づけを考えてみたい (Cf. Hall 2005: 'attitudes toward literature')。果たして文学と語学が結びつくのか、それとも文学はあくまでも語学とは切り離されたものとして教えられるべきなのか、そもそも英米学科生には文学の知識などは必要ないのであろうか。

2. アンケート調査

2.1 実施データ

アンケート調査は英米学科1回生必修科目である「英米文学入門1H」の第1回目の授業時に実施した。この授業には3回生編入生や再履修の2回生以上の学生も受講しているが、この調査では大学での英米文学系の授業をまだ受講したことのない新入生の意識を把握することが目的であるため、分析の対象とするのは1回生の回答に限定している。

実施日：2007年4月10日（火）

対象者：英米学科1回生

回答者数：78人

アンケートは記名式で、設問(7)(8)(14)を除き、他はすべて自由記述方式である。新入生オリエンテーションも兼ねたアンケートであるので、必ずしもすべての項目が本論と関係しているわけではない。

- (1) 英米学科に入った目的は何ですか？
- (2) 英米学科で何が勉強したいですか？
- (3) 文学は勉強すべきだと思いますか？（その理由も）
- (4) 英文和訳は必要ですか？（その理由も）
- (5) 英会話は必要ですか？（その理由も）
- (6) 卒論〔任意のテーマで200字×80枚〕は書きたいですか？もし書いたら何について？
- (7) 次の英米の作家について〔①知っている ②聞いたことはある ③知らない〕をつけてください。〔選択肢省略〕
- (8) 次の英米の作品について〔①知っている ②聞いたことはある ③知らない〕をつけてください。〔選択肢省略〕

- (9) 文学は好きですか？（どんな文学ですか？その理由も）
- (10) 英語で書かれた本は好きですか？（その理由も）
- (11) 映画は好きですか？（どんな映画ですか？その理由も）
- (12) 日本語字幕なしの英語音声だけの映画は好きですか？（その理由も）
- (13) 英語を習得にするためには「読む」という作業は必要だと思いますか？（その理由も）
- (14) 英語で書かれたものを読むなら、どんなものが読みたいですか？順位をつけてください。
- 文学作品（ ） 新聞（ ） 雑誌（ ） ノンフィクション（ ） 歴史（ ） リーダー [やさしい英語で書き直された本]（ ）
- (15) 英語で書かれたものを読みますか？（その理由も）
- (16) 英語で書かれた文学を読むことは英語の習得に役立つと思いますか？（その理由も）
- (17) 目標とする英語力はどの程度ですか？そのためにどんな学習が必要だと思いますか？
- (18) 英米学科生に英米文学の基礎知識は必要だと思いますか？（その理由も）

2.2 結果集計

設問に対する回答のみを、その理由等は除いて集計した。誤った解釈をさけるために、原則的に本人の記述に従って忠実に分類した。また「～と思いますか」という設問に対し、直接的に「はい」「そう思う」「いいえ」「そう思わない」と書かれてはいないが、文面から「はい」もしくは「いいえ」と読み取ることができる場合は、「無回答（肯定派）」もしくは「無回答（否定派）」という分類にした。単なる「無回答」とは、「はい」「いいえ」の回答がなされていない、またはその区別がつかない記述か、まったくの未記入のことである。

3. データの分析

3.1 語学志向の学生

英米学科を選んだ理由として「教師になりたい」「将来の仕事のため」もあわせ考えると、大半の学生が語学志向であるということが言えよう。この傾向は入学後に学びたいものにも反映されており、大半の学生が語学系のものを勉強したいと回答している。とりわけ語学のうちでも、「英会話」と明確に記入した学生が31人、「コミュニケーション」と記入した学生は18人となっている。「英会話」「コミュニケーション」の2つを重複して記入した学生は1人もいないので78人中49人、つまり6割以上を占めることになる。

文学を入学理由に挙げている学生はわずかに1人で、入学後に学びたいものとして挙げているのは5人しかいない。大方の予想通りであるが、総じて英米学科生は文学志向ではなく、語学志向が高いということをあらためて数値的に確認することができよう。

【資料1】

(1) 英米学科に入った目的は何ですか		
英語が勉強したい	25	32.1%
教師になりたい	15	19.2%
英語が話せるようになりたい	13	16.7%
英語力を伸ばす	9	11.5%
英語が好き	8	10.3%
入試関連	7	9.0%
将来の仕事のため	6	7.7%
英語が使えるようになりたい	3	3.8%
コミュニケーション力をつける	2	2.6%
外国に興味がある	2	2.6%
留学がしやすいと思った	1	1.3%
英語文化を知りたい	1	1.3%
外国文学を勉強したい	1	1.3%
海外に住みたい	1	1.3%
特になし	1	1.3%

※複数回答有り。パーセンテージは回答者数（78人）に対するもの。

【資料 2】

(2) 英米学科で何が勉強したいですか		
英会話	31	39.7%
コミュニケーション	18	23.1%
語学／英語	16	20.5%
実践／実用的な英語	6	7.7%
英米文学	5	6.4%
Reading	4	5.1%
英語を教えること	4	5.1%
Listening	3	3.8%
文化	2	2.6%
英語の歴史	2	2.6%
Writing	1	1.3%
TOEIC	1	1.3%
イギリス英語とアメリカ英語の違い	1	1.3%
アメリカの歴史	1	1.3%
商業英語	1	1.3%
フランス語会話	1	1.3%
中国語	1	1.3%

※複数回答有り。パーセンテージは回答者数（78人）に対するもの。

3.2 文学は必要か

英米学科のカリキュラムでは、1 回生時に必修科目として「英米文学入門」を春・秋のそれぞれの学期に 1 科目ずつ（合計 4 単位）履修することになっているが、それ以外の文学系の科目はすべて選択科目となっている。したがってほぼ文学系の科目を履修することなく卒業することも可能である。

学生の文学に対する意識であるが、48 名（61.5%）の学生が「文学は勉強すべきだと思う」という明確な回答をしている。逆に「すべきだとは思わない」と積極的に答えている学生は 9 名（11.5%）となっている。アンケート調査を実施したのが「英米文学入門」の授業時であったということも多少は影響しているかもしれないが、それでも 6 割という数字は予想を上回るものであった。「勉強すべきだと思う」と答えた主な理由としては、さまざまな知識の

習得や教養のためということになり、具体的には「知識／教養のため」(12)「英米のことを知る」(6)「文化を知る」(4)「英語を学ぶ／深く知る上で必要」(4)「英米人の考え方を知る」(3)「コミュニケーションを深めるため」(3)「自分の世界／視野が広がる」(2)「英米学科だから」(1) というものである。文学そのものという点では「文学に触れる」(2)や「おもしろそう／楽しそう」(3)という理由もある。また、「自然と会話表現や文法が入ってくる」というように、直接的に語学との関連で答えたのはわずかに1名であった。「文学は勉強すべきだと思わない」という答えの理由としては、「難しそう」(2)「文学はいらない」「英語が話せたらいい」というものが見られた。

【資料3】

(3) 文学は勉強すべきだと思いますか		
思う	48	61.5%
思わない	9	11.5%
ある程度	7	9.0%
わからない	6	7.7%
やりたい人だけ	4	5.1%
少し	1	1.3%
人それぞれ	1	1.3%
あまり思わない	1	1.3%
無回答	1	1.3%

知識としての文学の必要性は感じているようだが、実際に学生諸君がどれほどの英米文学の知識を持ち合わせているのかを確認するために、英米の作家、作品について質問してみた。取り上げた作家、作品は基本的に1年間の授業において取り扱う予定のもの、一般的に有名と思われるものであるが、何らかの客観的な基準に基づくものではなく、多分に筆者の趣味も反映されていることをご了解いただきたい。結果を見ると、作家に関してはさすがにシェイクスピアを知らない学生はいなかった。ただ、残りの作家についてはヘミングウェイが多少知られているくらいで、それ以外の作家はほぼ知られていないという状況である。

作品に関しては、シェイクスピアの作品はある程度は知られているようで『ロミオとジュリエット』を知らない学生は皆無となっており、『ベニスの商人』もかなりの学生が最低でも耳にしている。四大悲劇では『ハムレット』が抜きん出ており、ついで『リア王』『マクベス』の順で続くが、『オセロー』は7割強の学生が知らないと答えている。ディケンズの『オリバー・ツイスト』と『クリスマス・キャロル』、ヘミングウェイの『老人と海』、サリンジャーの『ライ麦畑で捕まえて』は1割程度の学生が「知っている」と答えているが、個人的には『ライ麦畑で捕まえて』はもっと一般的に知られているというイメージを抱いていた。これ以外の作品は一律に知名度が低い。想定外のところでは、『オリバー・ツイスト』と同様に『自負と偏見』（映画版は『プライドと偏見』）も近年映画化されたのだが、その割には知名度があまりないようである。また『チャトレイ夫人の恋人』や『偉大なギャツビー』の2つも意外と知られていなかったというのが現実である。

学生諸君の英米文学に関する知識を見ると、知識・教養として文学を勉強すべきだという意識と実際の知識の間には大きな隔たりが見られる。ことによると、自らの知識のなさの裏返しとして、文学を勉強すべきであるという意識が生じたのかもしれない。その真偽はさておき、この学生諸君の高い意識を十分に活かしながら、学生の現状に見合った指導というものが必要とされるであろう。教授者にとっては当たり前のものとなっている英米文学の知識でも、学習者にとってはまったく未知のものであるのだから。

【資料4】

(7) 次の英米の作家について [知っている／聞いたことはある／知らない] をつけてください				
	知っている	聞いたことはある	知らない	無回答
チャーサー	6	10	62	0
	7.7%	12.8%	79.5%	0.0%
シェイクスピア	46	32	0	0
	59.0%	41.0%	0.0%	0.0%
ミルトン	6	17	55	0
	7.7%	21.8%	70.5%	0.0%

ジェイン・オースティン	0 0.0%	8 10.3%	70 89.7%	0 0.0%
ワーズワース	0 0.0%	9 11.5%	69 88.5%	0 0.0%
コールリッジ	0 0.0%	4 5.1%	74 94.9%	0 0.0%
バイロン	4 5.1%	8 10.3%	66 84.6%	0 0.0%
ディケンズ	5 6.4%	16 20.5%	57 73.1%	0 0.0%
ブロンテ姉妹	1 1.3%	2 2.6%	75 96.2%	0 0.0%
ハーディ	2 2.6%	6 7.7%	70 89.7%	0 0.0%
オスカー・ワイルド	2 2.6%	16 20.5%	59 75.6%	1 1.3%
D. H. ロレンス	3 3.8%	6 7.7%	69 88.5%	0 0.0%
ジェイムズ・ジョイス	1 1.3%	3 3.8%	74 94.9%	0 0.0%
T. S. エリオット	2 2.6%	10 12.8%	66 84.6%	0 0.0%
グレアム・グリーン	0 0.0%	9 11.5%	69 88.5%	0 0.0%
ジョージ・オーウェル	1 1.3%	4 5.1%	73 93.6%	0 0.0%
バーナード・ショー	3 3.8%	5 6.4%	70 89.7%	0 0.0%
E. M. フォースター	1 1.3%	1 1.3%	76 97.4%	0 0.0%
サリンジャー	2 2.6%	5 6.4%	71 91.0%	0 0.0%
エドガー・アラン・ポー	3 3.8%	11 14.1%	64 82.1%	0 0.0%
マーク・トウェイン	2 2.6%	3 3.8%	73 93.6%	0 0.0%

フィッツジェラルド	1	3	74	0
	1.3%	3.8%	94.9%	0.0%
フォークナー	1	10	67	0
	1.3%	12.8%	85.9%	0.0%
ヘミングウェイ	21	37	20	0
	26.9%	47.4%	25.6%	0.0%
スタインベック	0	3	75	0
	0.0%	3.8%	96.2%	0.0%
テネシー・ウィリアムズ	1	9	68	0
	1.3%	11.5%	87.2%	0.0%
アーサー・ミラー	4	14	60	0
	5.1%	17.9%	76.9%	0.0%

【資料5】

(8) 次の英米の作品について [知っている／聞いたことはある／知らない] をつけてください				
	知っている	聞いたことはある	知らない	無回答
『ハムレット』	21	51	6	0
	26.9%	65.4%	7.7%	0.0%
『マクベス』	6	24	48	0
	7.7%	30.8%	61.5%	0.0%
『リア王』	10	24	44	0
	12.8%	30.8%	56.4%	0.0%
『オセロー』	4	15	59	0
	5.1%	19.2%	75.6%	0.0%
『ロミオとジュリエット』	14	64	0	0
	17.9%	82.1%	0.0%	0.0%
『ベニスの商人』	17	36	25	0
	21.8%	46.2%	32.1%	0.0%
『自負と偏見』	1	14	63	0
	1.3%	17.9%	80.8%	0.0%
『オリバー・ツイスト』	10	25	43	0
	12.8%	32.1%	55.1%	0.0%

『クリスマス・キャロル』	10 12.8%	26 33.3%	41 52.6%	1 1.3%
『荒地』	1 1.3%	7 9.0%	70 89.7%	0 0.0%
『ジェイン・エア』	0 0.0%	0 0.0%	78 100.0%	0 0.0%
『嵐が丘』	0 0.0%	9 11.5%	68 87.2%	1 1.3%
『ダーバヴィル家のテスト』	0 0.0%	0 0.0%	78 100.0%	0 0.0%
『チャトレイ夫人の恋人』	2 2.6%	3 3.8%	73 93.6%	0 0.0%
『第三の男』	1 1.3%	7 9.0%	69 88.5%	1 1.3%
『怒りのぶどう』	1 1.3%	2 2.6%	74 94.9%	1 1.3%
『マイ・フェア・レディ』	4 5.1%	13 16.7%	61 78.2%	0 0.0%
『モルグ街の殺人』	1 1.3%	1 1.3%	76 97.4%	0 0.0%
『老人と海』	8 10.3%	18 23.1%	52 66.7%	0 0.0%
『ハックルベリイ・フィンの冒険』	1 1.3%	5 6.4%	72 92.3%	0 0.0%
『偉大なギャツピー』	2 2.6%	0 0.0%	76 97.4%	0 0.0%
『八月の光』	2 2.6%	2 2.6%	74 94.9%	0 0.0%
『誰がために鐘は鳴る』	2 2.6%	15 19.2%	61 78.2%	0 0.0%
『ガラスの動物園』	0 0.0%	0 0.0%	77 98.7%	1 1.3%
『セールスマンの死』	1 1.3%	0 0.0%	77 98.7%	0 0.0%
『ライ麦畑で捕まえて』	10 12.8%	14 17.9%	53 67.9%	1 1.3%

3.3 文学と映画

「文学は好きですか」という問いに対しては、「あまり好きではない」「好きではない」「嫌い」「無回答（否定派）」の4つをあわせると38名（48.7%）となり、その理由としては「難しいから」（4）「本を読むのが嫌い」（4）「読んだことがない／知らない」（3）ということである。「好き」「種類によっては好き」「無回答（肯定派）」はあわせても13名（16.7%）でしかない。この文学嫌いという傾向は、ある程度予測のつくものであろう。「好き」「嫌い」を積極的に示さない（示せない）理由についてはほとんど書かれていないが、「文学作品を（あまり）読んだことがない」（3）というものがある。これまでに文学に接する機会が少ないために文学が嫌い、もしくは好きとも嫌いとも言えないこともあるようだが、このような学生には文学に接する機会を十分に与える配慮も必要であろう。

「映画は好きですか」という問いに対しては、「文学は好きですか」の場合のようなあいまいな回答はほとんどなく、約6割の学生が明確に「はい／好き」と答えている。その他の「種類によっては好き」「無回答（肯定派）」「いろいろ好き」「どちらかといえば好き」もすべて加えると、およそ85%の学生が多かれ少なかれ映画が好きということになる。

【資料6】

(9) 文学は好きですか		
あまり好きではない	18	23.1%
好きではない／いいえ	11	14.1%
嫌い	8	10.3%
好き	8	10.3%
無回答	6	7.7%
わかりません	5	6.4%
普通	4	5.1%
好きではないが、嫌いでもない	4	5.1%
どちらとも言えない	3	3.8%
種類によっては好き	3	3.8%
無回答（肯定派）	2	2.6%

嫌いではない	2	2.6%
興味あり	2	2.6%
興味なし	1	1.3%
無回答（否定派）	1	1.3%

【資料7】

(11) 映画は好きですか		
はい／好き	46	59.0%
種類によっては好き	10	12.8%
無回答（肯定派）	7	9.0%
嫌い	4	5.1%
いいえ／好きではない	3	3.8%
いろいろ好き	2	2.6%
普通	2	2.6%
どちらかと言えば好き	1	1.3%
あまり好きではない	1	1.3%
そんなに好きではない	1	1.3%
興味がない	1	1.3%

とりあえず〈文学嫌い／映画好き〉という図式を確認できたが、その図式が絶対的なものであるかを確かめるために、英語という要素を前面に出して、英語の本と日本語字幕なしの映画を比べてみることにする。「英語で書かれた本は好きですか」という設問に対して、明確に「好き」と答えているのが19名(24.4%)、「種類によっては好き」「無回答（肯定派）」「まあまあ好き」「ちょっと好き」「多少」「どちらかというとき好き」も加えると36名(46.2%)となり、「文学は好きですか」という設問の場合とは異なる結果となっている。好きな理由としては、知識の習得や語学学習といったものだけではなく、「読めた時の達成感」(5)という理由も挙げられている。「好きではない」「嫌い」「あまり好きではない」は、あわせて23名(29.5%)であり、その理由としては「読めない／理解できない」(12)「読むのに時間がかかる」(4)というものが見られる。「好き」「嫌い」が明確になっていない回答の理由としては、やはり「読んだことがない」(9)という理由が多い。

85%の学生が映画が好きという割には、「日本語字幕なしの英語音声だけの映画は好きですか」に対しては「好きではない」「嫌い」が30名（38.5%）、「無回答（否定派）」「あまり好きではない」「好きではないかもしれない」も加えると43名（55.1%）となる。その理由は圧倒的に「理解できない／わからない」（36）ということになっている。「好き」「無回答（肯定派）」「少し好き」「まあまあ好き」は、17名（21.8%）でしかない。「無回答」の12名のうち10名がその理由として「（あまり）見たことがない」を挙げている。

学生の文学嫌いは明らかなようではあるが、文学ではなく、英語で書かれた本という観点から文学の扱いを考えることによって、道が開ける可能性もあるようだ。ただ一つ気をつけておくべきことは、理解度をどのようにして高めるかということである。たとえ映画であっても、理解できない字幕なしの英語だけのものであれば、それを学生が好むということはない。同様に英語で書かれた本というだけで、文学がすぐに受容されるということは期待できない。英語で書かれた文学であっても、それを十分に学習者に理解させることができれば、学習者の反応は変わってくるはずであろう。

【資料 8】

(10) 英語で書かれた本は好きですか		
好き	19	24.4%
好きではない／いいえ	13	16.7%
無回答	8	10.3%
種類によっては好き	7	9.0%
嫌い	6	7.7%
無回答（肯定派）	5	6.4%
あまり好きではない	4	5.1%
普通	3	3.8%
嫌いではない	3	3.8%
わからない	2	2.6%
どちらとも言えない	2	2.6%
まあまあ／まあまあ好き	2	2.6%
好きでもないが、嫌いでもない	1	1.3%

ちょっと好き	1	1.3%
多少	1	1.3%
どちらかというと好き	1	1.3%

【資料 9】

(12) 日本語字幕なしの英語音声だけの映画は好きですか		
好きではない／いいえ	18	23.1%
無回答	12	15.4%
嫌い	12	15.4%
好き	10	12.8%
無回答（否定派）	7	9.0%
無回答（肯定派）	5	6.4%
あまり好きではない	5	6.4%
わからない	2	2.6%
嫌いではない	2	2.6%
微妙	1	1.3%
普通	1	1.3%
好きではないかもしれない	1	1.3%
少し好き	1	1.3%
まあまあ好き	1	1.3%

3.4 英語を読むこと

英語習得における「読む」という作業の必要性については、61名（78.2%）の学生がその必要性を積極的に認めている。さらに「無回答（肯定派）」も加えると85%を超える。ただし、この回答をした学生の中には「読む」という作業を、とりわけ音読と勘違いしている者も数名見られた。

「読む」という作業の必要性を多くの学生が認識しているにもかかわらず、「英語で書かれたものを読みますか」という問いに対しては、「読まない」が35名（44.9%）、「無回答（否定派）」「あまり読まない」「特に読まない」を加えると56名（71.8%）となる。その理由としては、やはり「理解できない」（15）「読む機会がない」（16）が主なものとなっている。

【資料10】

(13) 英語を習得するためには「読む」という作業は必要だと思いますか		
はい／必要／思う	61	78.2%
無回答（肯定派）	6	7.7%
わかりません	3	3.8%
少しは必要	2	2.6%
必要ない／思わない	2	2.6%
必要なくはない	1	1.3%
不必要	1	1.3%
特に必要ない	1	1.3%
無回答（否定派）	1	1.3%

【資料11】

(15) 英語で書かれたものを読みますか		
読まない／いいえ	35	44.9%
無回答（否定派）	10	12.8%
あまり読まない	10	12.8%
読む／はい	8	10.3%
たまに	4	5.1%
無回答	4	5.1%
時々読む	3	3.8%
種類によっては読む	3	3.8%
特に読まない	1	1.3%

英語で書かれたどのようなものが読みたいのかという問いに対しては、1位の順位づけだけでは雑誌とリーダーの人气がそれぞれ17票となっている。しかし、全体的に見ると雑誌、ノンフィクション、新聞、リーダー、文学作品、歴史という順に人气が高い。リーダーは1位の票数も多いが、6位の票数も19票とかなり多い。やさしい英語で書き直された本を好む集団と、逆にそれを嫌う集団がいるということであろうか。文学作品はそれほど人气があるというわけではないが、かといって人气がまったくないということでもない。不人気という点では、意外と歴史ものが際立っている。

【資料12】

(14) 英語で書かれたものを読むなら、どんなものが読みたいですか 順位をつけてください						
	文学作品	新聞	雑誌	ノンフィクション	歴史	リーダー
1 位	11	15	17	15	1	17
	14.1%	19.2%	21.8%	19.2%	1.3%	21.8%
2 位	9	15	23	15	8	7
	11.5%	19.2%	29.5%	19.2%	10.3%	9.0%
3 位	12	13	15	11	10	14
	15.4%	16.7%	19.2%	14.1%	12.8%	17.9%
4 位	18	15	9	17	8	9
	23.1%	19.2%	11.5%	21.8%	10.3%	11.5%
5 位	16	11	7	18	14	10
	20.5%	14.1%	9.0%	23.1%	17.9%	12.8%
6 位	10	7	5	0	35	19
	12.8%	9.0%	6.4%	0.0%	44.9%	24.4%
無回答	2	2	2	2	2	2
	2.6%	2.6%	2.6%	2.6%	2.6%	2.6%
ポイント 平均	42.5	48.5	53.8	49.3	28.8	43.2
	(1位:6点 2位:5点 3位:4点 4位:3点 5位:2点 6位:1点に換算)					

※リーダー：やさしい英語で書き直された本

3.5 英米文学を読むこと

「英語で書かれた文学を読むことは英語の習得に役立つと思いますか」という設問に対しては、57名（73.1%）が賛成、「無回答（肯定派）」も加えると63名（80.8%）の賛成となる。この設問に否定的な回答は合計でも8名（10.3%）にしかすぎない。否定派の理由としては「将来、活かそうにない」「海外の人と文学について語ることはまずない」「文章が難しそうである」「文学を読んでも、聞けるようにも話せるようにもならない」というものである。

「英米学科生に英米文学の基礎知識は必要だと思いますか」に対しては、49名（62.8%）が積極的に「必要」と答え、その他の賛成派を加えると62名

(79.5%) に達する。「不必要」という意見への傾倒は合計でもわずかに 6 名 (7.7%) にすぎず、「わかりません」という保留組10名 (12.8%) よりも少ない。「不必要」という意見の理由としては「文学に興味がない」「興味がある人は必然的に身につく、興味のない人は身につかない」「他に単語や文法等のすることがある」「英語ができればいい」となっている。

【資料13】

(16) 英語で書かれた文学を読むことは英語の習得に役立つと思いますか		
役立つと思う／はい	57	73.1%
無回答 (肯定派)	6	7.7%
わからない	4	5.1%
思わない	2	2.6%
あまり必要ない	2	2.6%
それなりに役立つと思う	1	1.3%
種類によっては役立つと思う	1	1.3%
あまり役立たない	1	1.3%
特に必要ではない	1	1.3%
役立たない	1	1.3%
不要	1	1.3%
無回答	1	1.3%

【資料14】

(18) 英米学科生に英米文学の基礎知識は必要だと思いますか		
はい／必要	49	62.8%
わかりません	10	12.8%
思わない	4	5.1%
ある程度	3	3.8%
無回答 (肯定派)	3	3.8%
多少は必要	2	2.6%
少しは必要	2	2.6%
最低限は必要	2	2.6%
まあ必要	1	1.3%
あまり思わない	1	1.3%
いらない	1	1.3%

4. おわりに

今回のアンケート調査を通じて把握できたことをまとめておこう。

- ・英米学科に入学してくる学生は、あくまでも語学志向であり、実践的な使える英語の習得を目指している。
- ・語学志向でありながらも、文学を学びたいという意識は持っている。ただ、基本的に英米文学の知識は乏しい。
- ・文学は好きではなく、映画を好む傾向にある。英語で書かれた本には少なからず関心があるものの、それがとりわけ文学作品であるというわけではない。
- ・「読む」という作業が英語習得につながるという意識はあるが、実際に英語で書かれたものを読むという行為にはなかなかつながらない。その理由としては、英語が読めない、英語を読む機会がないというものである。
- ・英語で書かれた文学が英語の習得につながることで、英米文学の基礎知識の必要性はかなり認識されている。

文学の需要は急速に激減しており、〈文学は不必要〉という意識が学生の間でかなり見受けられるのではないかというのが当初の予測であったが、そうではなかった。結果的に学生の意識からは〈語学志向〉〈文学嫌い〉〈知識・教養のための文学〉というキーワードを読み取ることができるだろう。そしてこの3つのキーワードをすべて満たすものとして、語学教育と文学を結びつけた文学教育を展開することにも大きな意義があるのではなからうか。文学史のキャンノンに則ったシラバスではなく、あくまでも語学という側面から文学教材を選び、第一義的には文学教育を通じて英語が習得され、そして副次的に知識・教養も身につくシラバスが構築できれば、学生のニーズに応えることができるとも考えられる。文学を語学教育に使用する効用として、言語の習得と異文化理解が挙げられていることはすでに冒頭で触れたが、学生の側でもこの2つの

要素が意識されているということは興味深い発見である。

* * *

今回の意識調査はあくまでも予備的な調査であって、この結果で学生の文学と語学教育に対する意識がすべて明らかになったわけではないが、その意識の輪郭は捉えることができたようではある。筆者が学生の頃の文学教育は、日本語で書かれた文学史や文学概論のテキストを学習し、作品研究・講読ではひたすらに辞書を引いて調べ、文法・訳読方式の授業に備えるというものであった。もちろんこの教育スタイルは英米文学を学ぶための学科には相応しいものであったのだが、現在の英米学科は少なくとも英米文学を中心に学ぶ学科ではもはやないということである。語学を中心とする学科に変貌したのであるから、その教育理念や学生の実態に適う形の文学教育を追及していくべきであろう。次の課題としては、意識調査を継続し、効果的な文学教育のあり方を、具体的なシラバスをも含めて探求していくことである。

Works Cited

- Brumfit, C. J. and Carter, R. A. (eds.) (1986) *Literature and Language Teaching*. Oxford: Oxford University Press.
- Day, Richard R. and Bamford Julian. (1998) *Extensive Reading in the Second Language Classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hall, Geoff. (2005) *Literature in Language Education*. New York: Palgrave Macmillan.
- Lazar, Gillian. (1993) *Literature and Language Teaching: A Guide for Teachers and Trainers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 松本真治 (2007) 「2006年度英語基礎力調査 データと分析」 佛教大学教授法開発室『FD Review』 Vol. 2: 1-44.
- 洋販ブックネット <<http://www.yohan.co.jp/toEIC/730.html>>